

# 金融経済概観

## 金融市場動向

—平成5年12月—

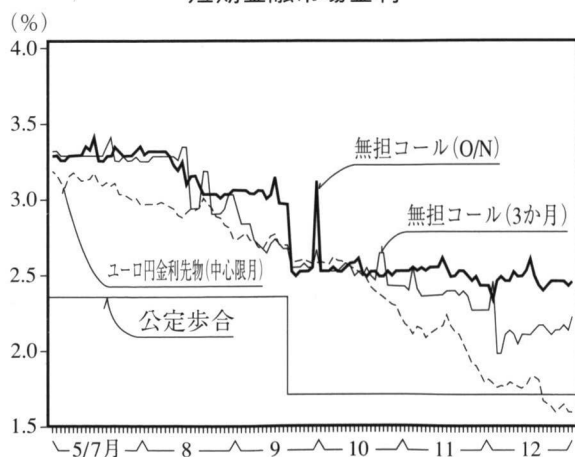
(平成6年1月21日)

### 1. 短期金融市場

12月中の無担コールオーバーナイト・レートを見ると、月初にやや低下した後、月央にかけての一時的な上昇を除けば、ほぼ横ばいで推移した。ターム物レートは月初に低下した後、横ばい圏内で推移した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）は月中を通じて低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は44兆9,963億円と前月（42兆5,629億円）を上回った。

短期金融市場金利



### 2. 資本市場

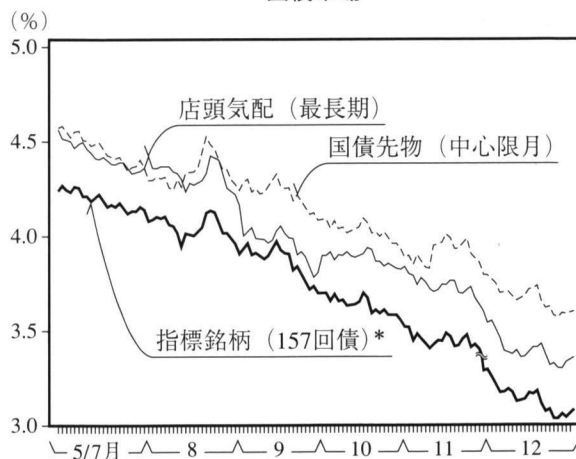
12月の国債利回り（157回債）は、景気の先行き不透明観等から引き続き低下し、27日に3.010%と年初来ボトムを更新した後、3.040%で越年した（前月末3.285%、国債先物中心限月は3.613%＜前月末3.828%＞）。

国債の出来高を見ると、現物（店頭取引）は前月を上回った一方、先物は前月を下回った。

株式市況（日経平均株価）は、景気対策を巡る思惑が交錯したこと等から値動きの荒い展開となり、結局17,417円（前月末比+1,011円）で越年した。

既発債市場利回り

—国債市場—



(注) \*11月25日以前は145回債。

また、株式出来高（東証第一部月中1営業日平均）は2.67億株と前月（3.00億株）を下回った。



起債動向をみると、短期国債については、6か月物が順調な応札となった（12月7日入札分は募入平均利回り1.709%、応募倍率2.37倍）一方、3か月物はやや低調な入札結果となった（12月14日入札分は募入平均利回り1.904%、応募倍率1.38倍）。また、超長期国債についても入札が行われ、順調な入札となった（12月21日入札分は募入平均利回り3.919%、応募倍率3.01倍）。

国内公募普通社債の発行は前月を上回った（11月2,660億円→12月4,200億円）。

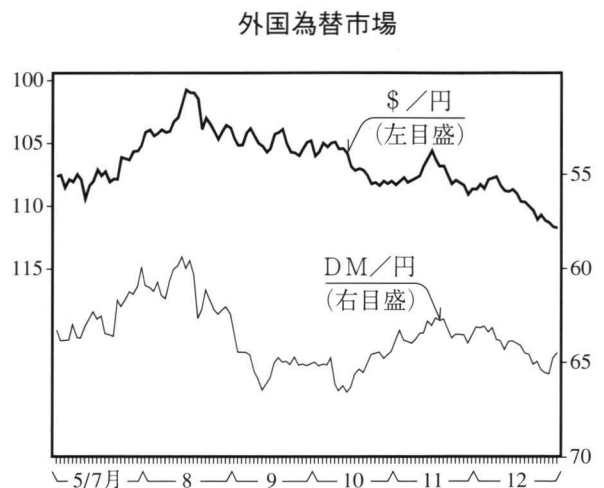
国内エクイティ市場での発行（12月払込み分、増資を除く）は前月を下回った（11月1,790億円→12月1,275億円）。

### 3. 外国為替市場

12月の円の対米ドル直物相場（終値）は、

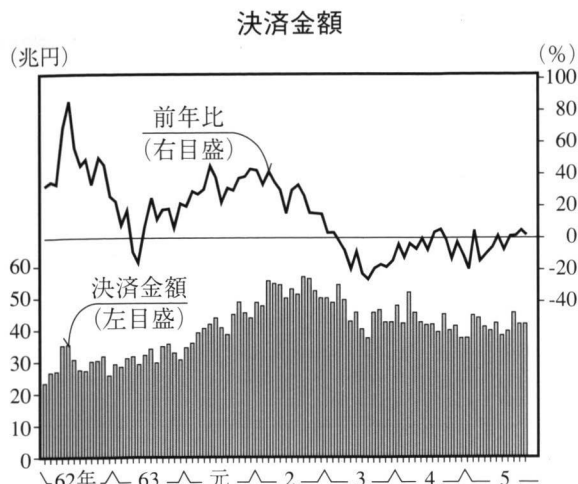
上旬に一時上昇したものの、月中を通じてみれば緩やかに円安化傾向をたどり、111.89円で越年した（前月末108.82円）。また、円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）も低下傾向をたどり、64.21円で越年した（前月末63.59円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は159.7億ドルと、前月（164.3億ドル）を下回った。



### 4. 決 済

12月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京、前年比+3.1%）、全銀システム取扱高（前年比+11.3%）、外為円決済交換高（同+25.6%）、日本銀行当座預金受払額（同+15.8%）ともに前年同月を上回った。また、国債の決済金額（1営業日平均）についても移転登録（同+60.6%）および振込口座振替（同+14.7%）とも前年同月を上回った。



(注) 1. 1営業日平均。

2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、  
外為円決済交換高の合計額。

## 5. 資金需給、金融調節

12月の資金需給をみると、銀行券要因が6兆7,247億円の不足（前年同月5兆1,733億円の不足）となった一方、財政等要因は、法人税を中心とする税揚げがみられたものの、国債利払いや公共工事の支払い等がかさんだことから、12月としては11年ぶりに払超に転じ、1兆1,221億円の余剰（同2,693億円の不足）となった。こうしたことから全体でも5兆6,026億円の不足（同5兆4,426億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は手形買入れ等により資金を供給した。

6年1月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、冬季ボーナス資金や年末決済用資金の還流が見込まれることから月中5兆3,000億円程度の余剰（前年同月4兆2,710億円の余剰）となる見通しである一方、財政等要因は冬季ボーナス等に係る源泉所得税を中心とする税揚げ等から1兆4,400億円程度の不足（同9,506億円の

不足）となる見通しであり、全体では3兆8,600億円程度の資金余剰（同3兆3,204億円の余剰）と予想される。

## 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

11月のマネーサプライをみると、 $M_2 + CD$ 平残前年比伸び率は+1.5%と10月に比べ0.3%ポイント低下した。これは、通貨供給要因に則してみれば、金融機関貸出の伸び率鈍化等を反映したものである。通貨種類別にみると、預金通貨、準通貨の伸び率が低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.0%と10月に比べ0.2%ポイント低下した。

12月の $M_2 + CD$ 平残前年比伸び率は+1.5%と11月比横ばいとなった。通貨種類別にみると、預金通貨の伸び率が上昇した一方、 $CD$ の伸び率は低下した。広義流動性の平残前年比伸び率は+2.9%と11月に比べ0.1%ポイント低下した。

12月の銀行券平残前年比伸び率は+3.8%と前月比若干低下した。

12月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+ $CD$ 、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+1.3%と前月比低下した。また、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+0.5%と既往ボトムとなった前月同様の低い伸び率となった。

## 7. 貸出・預金金利

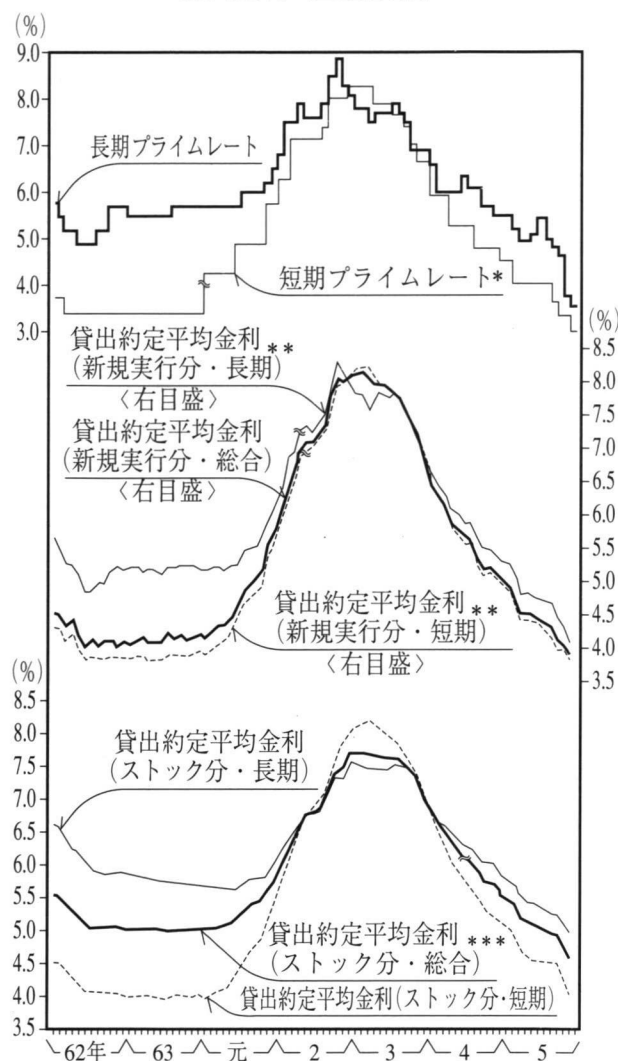
11月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、市場金利の低下や長期プライムレートの引き下げ（11月10日、4.5%→3.8%）等を背景に、短期・長期

ともに低下したため（短期：前月比 $\Delta 0.155\%$ 、長期：同 $\Delta 0.255\%$ ）、総合でも低下し（同 $\Delta 0.182\%$ 、10月4.044%→11月3.862%）、それぞれ既往ボトムを更新した。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに引き続き低下したことから（短期：前月比 $\Delta 0.128\%$ 、長期：同 $\Delta 0.103\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.126\%$ ）、総合でも前月比 $\Delta 0.114\%$ 低下し、5か月連続で既往ボトムを更新した（総合：10月4.710%→11月4.596%）。

この間、11月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比低下した（10月2.250%→11月2.065%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) \* 元年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

\*\* 2年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

\*\*\* 4年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)